Black Rainbow
ブラック・レインボウ

ワールド・ガイド

エルディン宮廷　魔術師・博士

Ulbec Equrecor

目次

世界

☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘☘

…われわれの住むこの大地は球形であり、ハマンタールと呼ばれる。そして、これを取り巻く宇宙には、数多くの恒星がある。太陽もその中のひとつである。…

ハマンタールは太陽の回りを公転している惑星である。しかし、太陽を回る惑星はこれだけではない。現在のところ、モーラース、ヴァーディル、ハマンタール、ムーダル、アケラー、ユナー、シラー、アードム（内側より）の存在が確認されている。ただし、『捨てられた神々』ヘルタスとの精神的接触に成功したと主張するファルファックスのグリエンヌによれば、この他に4個の惑星が存在するらしい。彼女はそれらにナラン、プレール、デジェンタ、ヴィンスターの名前を与えている。

昼間は太陽の光で見えない恒星（ハマンタール自身の回転による全天的移動を除いては不動の星）であるが、夜にはその姿を現す。恒星は満天に存在するものの、一箇所だけ、恒星のない空白部分――正確には、全天でもっとも明るいファストールを囲む円環状の暗黒部分――が存在する。神々の時代の書物にもこの〝環〟について言及したものがないために、〝環〟の意味や存在理由について多くの議論が戦わされてきたが、信頼するに足る説はまだ出ていない。たとえば、「恒星は神の〝座〟であり、『捨てられた神々』の封印の結果が〝環〟である」というフィリアギスの説は、『捨てられた神々』以外に、数え切れない数の神の存在を必要とする（そんな神々が存在しないことは神学上から明白である）し、また、アーリン神とエリータ神との戦いの際に消え失せたというリンスターの説は、この2神が存在していたころの古文書（カルキスト時禱書）に〝環〟が描かれている事実を無視している。

民間伝承ではこの〝環〟は不運の象徴と見なされている。特に、半ば地平線に隠れた状態の〝環〟（〝闇の中の虹〟〝黒虹〟などと呼ばれる）が、昼間に虹の出た場所に出たのを見ると、その人間は死ぬとさえ言われている。

【小サイヴァル著：『スカルゲルン博物誌』第1章より抜粋】

魔術

『この世界には２種類の人間しかいない。魔術が使える人間と使えない人間だ。』という言葉がある。これは真実だ。『この世界には２種類の人間しかいない。左利きの人間と左利きでない人間だ。』という言葉程度には。

幸運にも――あるいは不幸にも――私は魔術師、魔術が使える人間である。それ故、何度となく普通の人間から『どうして魔術が使えるのか？』と尋ねられた。魔術師なら誰もが訊かれ、そして悩む問題であろう。私自身、いまだにこの解答を見出すまでには至っていない。モナールがそう作り給いし故、としか答えられないのである。

この質問を投げかけてくる者たちの貌には必ず羨望が見えた。彼らの心底にある疑問は『どうして魔術が使えるのか』ではなく、『お前に使えてなぜ俺には使えないのだ』だったのだ。彼らは知らない、我々がそのために如何なる代償を払わなければならなかったかを。…

われわれ魔術師は魔術を８種に分類してきた。火の魔術、風の魔術、気の魔術、土の魔術、心の魔術、エネルギーの魔術、神聖魔術、そして暗黒魔術。それぞれ同じ魔術と呼ばれながら、修得には全く異なる修業を要する。さらに暗黒魔術は過去の文書にその名前が記されているのみで、少なくとも私の知る限りでは現存していない。

魔術を掛ける方法をここで述べることはできないが、基本原理だけは説明しよう。まず、魔術に必要な力を召喚する。そして、その力を対象に作用させる。これだけである。

召喚は非常に簡単で、各系統ごとに異なる一定の動作と呪文が必要なだけである。ところが、それを対象に作用させる過程は、非常に困難となる。力がどこにどのように作用するかは、術者の意識が特定の状態を連続してとることによって決まるのである。召喚後の動作や呪文はその意識状態を作り出すためだけのものであり、他人が動作あるいは呪文を完全に模倣したとしても、決して魔術は発効しないのである。いわゆる魔術師の修業というものは、そのほぼ全てが、この特定の意識状態を特定の手順（呪文、動作など）によって確実に生み出せるようにするものなのである。

いわゆる「魔法陣」は、この「特定の意識状態」を形成するための一手段であり、魔法陣そのものの存在は不必要となることが多い。魔法陣形成の過程で形作られた意識の作用で生まれた魔力は、魔法陣から独立しているのだ。ただし、「大魔法陣」と呼ばれるものは、魔法陣として配置された物質が魔術の存続に関係しているために、魔法陣の破壊が魔力の破壊につながる（もっとも、大魔法陣を施すほどの魔術師であれば、その魔法陣を守護する別の魔術をかけることを忘れるはずはないが）。

【魔術師ペルサスの書簡より抜粋】

国家

…スカルゲルンとアトランには、人間・エルフ・ドワーフの国家しかない。他の種族は、国家体制というところまでは成熟していない。

Eshel　　エシェル

エシェルは、スカルゲルン中央に位置するアレール大森林にあるエルフの国である。首都の名前はローリン。この国の存在によって、大陸スカルゲルンの人間国家は南西のアルヴァード、北のファルファックス、そして南東のエルディンが切り離されている。

アレール大森林はエシェルの領土となっており、人間その他が足を踏み入れることは許されていない（ごく限られた者だけが、「エルフの友」としてエシェルに自由に入れるらしいが)。それゆえ、エシェルについて詳しいことはほとんど判っていない。ローリンの位置すら、イノン湖のそばとしか判明していない。

Grindael　　グリンデール

エシェルの北西、スカルゲルンのガンダーレン山脈（人間はガンハイム山脈と呼ぶことが多い）とエスタスのローギル山脈に跨がって存在するドワーフの国である。国全体を統一する支配体制は存在せず、いくつかの部族が連合している状態らしい。かつて、エシェルとグリンデールが戦争状態に陥ったことがあったが、現在では平和状態にある。

グリンデールは、スカルゲルン／エスタスにおける金属のもっとも大きな産出地である。われわれの使う金属は、ほとんどがここで採れたものであるといっても過言ではないだろう。ところが、なぜかドワーフは金属製品を輸出することにこだわりを持っており、材料としての金属を輸出することは断固として拒否している。それゆえ、われわれが加工原料を彼らから輸入しようとする時には、例えば「鉄の角柱を10本」という風に、あたかもそれが製品であるかのごとくに交渉しなければならないのである。そうすれば、ちゃんと指定した形状の材料が――製作者の刻印付きで――送られてくる。

Eldin エルディン

スカルゲルンの南東部を占める国家。首都の名前もエルディン。かつてはスカルゲルン大陸のうち、エシェルとアルヴァードを除いた全ての地域を領地としていたが、2755年に分割相続によって現在のエルディンとファルファックスに分れた。

1550年、かつての統治神（現在は『捨てられた神々』と呼ばれる）ザグレンがこの地にて復活した。人間を次々に狂人に変えていったザグレンはエルディンを恐怖に陥れたが、ついには魔術師バイカラスの作成した巨大なゴーレムに倒された。そのゴーレムは今でもガンゲックス北西の荒野に横たわっていると言われる。

Fulfax ファルファックス

エルディンから分離・独立した地域。首都はスタンザックス。

ファルファックスがまだエルディンの領土であったころ、イオン湖に怪物が棲息しており、周辺に多大な被害をもたらしていた。このモンスターを倒したのは女騎士ナサリアであったが、彼女もまたこの戦いで死亡した。ナサリアの業績を讃えるために結成されたのが、かの有名なイオン騎士団である。

ファルファックスの分離独立後、イオン騎士団は同国の主力騎士団となったが、2796年、復活した『捨てられた神々』エナリドールを倒すため出陣、任務は果したものの騎士団はほぼ壊滅した。

Ulverd アルヴァード

スカルゲルン南西部に位置する、スカルゲルンで一番古い国家。ここの首都ヘクシスには、大陸で唯一のエンディーン教会がある。

Newell ネヴェル

ネヴェルの名は、（アトラン追放時の）傭兵隊長の名前からきている。雪深い気候ゆえ、豊かな国ではない。産業的基盤は海産物と木材であるが、アトランとは反目しているために貿易は全て海路で行なわれている。また、非常に優れた傭兵をスカルゲルンの各国に送り出している。

Atran アトラン

かつてのアトランは傭兵騎士の輸出国として世界に知られていた。スカルゲルンの国々の剣となることによって、自国の安全を保っていたのである。しかし、アトラン王位を襲った愚王エルゲリストは、それらの国に送った剣でその使用者を支配しようと企んだ。彼は、当時ファルファックスに送り出していた傭兵隊にファルファックス王宮占領の命を与えた。ところが、傭兵隊長ネヴェルはこれに従わず、王に真意を質すために部下を連れて急遽帰国の途についた。

エルゲリストは国内の全民兵軍を楯にネヴェルと対面した。そして、ファルファックスに対する契約不履行と、王命反逆の咎でネヴェル及び彼の傭兵たちに追放を言い

渡した。ネヴェルは、国民の血を流すことを避けるため敢えてこの屈辱に耐え、ナストール山脈の北へと去ったのである。だが、彼に与えられたものは汚名と失意だけではなかった。王よりも彼の人格を信ずる多くの傭兵隊長たちもネヴェルと行動を共にしたのであった。

その後、さまざまな外交努力によりネヴェルとスカルゲルン諸国家、およびアトランとスカルゲルン諸国家との関係は正常化したが、ネヴェルとアトランとの関係は断絶したまま今日に至っている。

【グローデル『地理』第2章より抜粋】

神

☘☘

神学上、神は、モナール、『捨てられた神々』、エンディーン、ヘクサールの４種に分類されている。

モナール：

世界創造神。この宇宙を創りあげた神である。その後、モナール神はこの世界から消えて、別の世界の創造を行なっていると言われる。

モナール神は、創造後の世界を統治させるべく一団の神々（『捨てられた神々』）を創造したが、彼らの統治能力に不満をおぼえたため、モナールはそれらの神々を見捨てて、新たな２主神エンディーンを創造した。

『捨てられた神々』：

モナールがこの世界の統治者として最初に創りあげた神々。当時は単に「統治神」と呼ばれていた。だが、「統治神」の各神は統一性に欠け、世界は混沌状態に陥った。そのため、「統治神」はモナールから見限られてエンディーンに統治神の地位を奪われた。その際、神としての能力を大幅に制限されて、この世界の各地に封印されたために、『捨てられた神々』と呼ばれるようになった。

「エンディーンの闘争」以後、『捨てられた神々』が封印を打ち破ってこの世界に帰還したことが何度かある。しかし、その度に人間たちの手によって破壊、あるいは再封印されている。

『捨てられた神々』は、現在のところ少なくとも85柱の存在が確認されているが、総数は不明である。名前の判明している『捨てられた神々』を以下に示す：

ゼルト，デュダー，アルニス，ドンター，ヘルタス，カンダー，
エナリドール，セリズ，サルデラン，イオンディル，
ヴェスカヴェル，サライ，アイゼンマル，スラスベルス，
オンデリック，エルミオール，ザグレン

エンディーン：

第２の世界統治者。アーリンとエリータの双神である。しかし、この２神は対立して、互いに滅びた（「エンディーンの闘争」）。現在の暦はこの年を０年としているから、この事件は2810年前のはずである。

エンディーン対立の原因はわからない。何の前触れもなく、ただ、ある日突然この２神が戦い、そして消えていったのである。

ヘクサール：

エンディーンが創り出した6柱の小神たち（アルドリス、イルトマール、メスレーラ、レデラス、サレノール、ザロネット）。エンディーンが倒れた後、この世界に唯一残っている神々である。『捨てられた神々』、そしてエンディーンは世界を積極的に統治していたが、「エンディーンの闘争」以後、つまりヘクサールの時代となってからは、神の関与は激減した。その理由がヘクサール自身の口から語られたことはないものの、『捨てられた神々』の二の舞を恐れてではないかという説が一般には流布している。

「エンディーンの闘争」以前の歴史書や伝説には、死者復活をはじめ現在では考えられないような神聖魔術が語られている。それは、神聖魔術が神の関与を力の源泉にしているためであって、神の関与が大きかった「闘争」以前は実際にそういった「奇跡」が可能だったのである。

【グレンリンデ『エルの書』より抜粋】

生物

✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤

amphisbaena　アムフィスバイナ

前後に頭を持つ毒蛇。全長１m程度で、緑色に黒い縞模様がある。毒は、噛みついた時に注入するだけでなく、相手に吐きつけることも可能。頭がふたつあるため、通常は、どちらか一方の頭が前に位置し、もう一方は後方を向くことになる。また、戦闘時には身体を曲げて、ふたつの頭が同じ相手を攻撃することもできる。

賢者ネクストスの報告によれば、この蛇は体の中央に産卵口があってそこから産卵する。しかも、二匹のアムフィスバイナが交尾しなくても産卵できるらしい。また、前方にくる頭は常に一定で、ふたつの頭は同格というわけではないとも賢者は伝えている。おそらく雄の頭と雌の頭がひとつずつ付いているのであろうが、われわれがそれを見分けることは不可能に違いない。

basilisk　バシリスク

全長１フィートほどの灰色の蛇で、白い斑点がある。また頭部には菱形の模様がある。その体液には生物を石化する効果があり、非常に危険である。報告によれば、この蛇が吐く息にすらその力があるらしい。普通の蛇は体を水平方向に波打たせて移動するが、バシリスクは体を垂直方向に波打たせて進むので、見分けるのはさして難しくないだろう。

behir　ベヒール

巨大なトカゲ。雄は背中に細長いこぶがあり、頭に角状の突起が２本ある。長い舌を持ち、それを相手に巻きつけて攻撃するが、雄はその時に電撃を放つことがある。

caeruleus　ケルレウス

河に棲む非常に巨大な生物。形状はミミズそっくりだが、全身が深い青色で、一端に円形の口を持つ。全長は軽く30mに達すると言われる。河のそばを陸上動物が通りかかると、水中から躍りかかって呑み込んでしまう。

catoblepas　　カトブレパス

水辺に棲む、水牛に似た頭が長い頸についた、緩慢な動物であるが、その眼はいわゆる邪眼である。これに睨まれて生きて帰ったものは稀である。もっとも体の割に頭部が大きいために通常は頭を下げていることが多く、こちらが先に発見しさえすればそう怖くはない。

cockatrice　　コカトリス

コカトリスは鶏に似た生物である。ところが世間の一部には、コカトリスは蛇であるという説を信じている者もいる。これは、古代の書の中でバジリスクを「コカトリス・サーペント」と呼んでいたことから生じた誤解である。

上記からも判るように、コカトリスにはバジリスクと同じ石化能力がある。ただし、バジリスクではその役割は体液が果していたが、コカトリスは羽毛にその能力がある。

dragon, wyvern, wyrm　　ドラゴン　ワイヴァーン　ワーム

森や山岳地帯に棲む巨大な生物で、ドラゴン族と総称される。蜥蜴の体に蝙蝠のような翼を持つ。肢を持たないものをワーム、2肢のものをワイヴァーン、4肢のものをドラゴンと称して区別されてきたが、6肢あるいは奇数の肢を持ったドラゴンも報告されている。伝説の中には、人間以上の知恵と魔力を持った竜が登場するが、それらは現存するこれらドラゴン族とは異なる生物のようだ。

duroceros　デュロセロス

エルディンの湿地に棲む大型の哺乳類で、頭に大きな角を持つ。そして、全身は鎧のような甲羅で包まれている。性格は温厚だが、縄張りへの侵入者に対してはその角を武器として徹底的に戦うと言われている。この習性と姿から、デュロセロスを紋章に取り込んでいる騎士も多い。

dwarf　ドワーフ

エルフ、人間と並んで、この世界の三大種族を形成する人間型種族。場所によってはドウォーフとも呼ばれる。身長はわれわれ人間よりもかなり小さいが、力は人間を越える。雄は非常に髭が濃く、胸まで長く伸している（もっとも、人間型種族の中で髭を剃ったり髪を切ったりするのは人間だけであるが）。

elf　エルフ

われわれ人間に似ているが、やや小柄で、わずかにとがった耳朶を持つ。毛髪はブロンドから銀。瞳の色は、ヴァイオレットから薄い緑までさまざまである。人類に比べて遥かに寿命が長いが、エルフはある程度まで成長するとそれ以後外観が変化しないために、まるで寿命が短いかのように見える（つまり、老いた姿のエルフはいないということ）。

エルフは、人間、ドワーフと並ぶ知的種族である。しかし、エルフ以外の種族との接触を好まないため、正確なところは判っていない。

森を好むエルフは、そのほとんどがアレール大森林に暮している。しかし、スカルゲルンに散在する小さな森の多くには、その森を護るエルフの集落があると言われている。

giant　ジャイアント

身の丈４ｍを越える生物で、森や山岳地帯に棲息する。ほとんどが人間型だが、ときどき頭が二つ、あるいは三つある個体も目撃されている。一般に、ジャイアントはのろまで愚鈍であると思われているが、これは事実ではない。実際には、かなり機敏な動作ができる。

goblin　　ゴブリン

小柄な人間型種族。頭蓋は平坦で中央部だけが隆起している。眉は太く、耳はとがっている。手足は細長い。知能は低い。好戦的種族ではなく、通常は人間の土地から離れた場所で平和に暮しているが、時としてオークなどの手下として使われることがある。

harpy　　ハーピー

人間女性の胸と頭を持つ大型の鳥。しかし、人間に似ているのは外見だけであり、知能に関してはただの鳥である。

雄雌ともに頭部・胸は人間女性であり、また授乳は行なわないことから（卵生である）、ハーピーの持つ特異な外見は、偽装のためのものであると思われる。ペリトン（後述）のような合成生物ではないに違いあるまい。

hydra　ハイドラ

エルディンの湿地には、ハイドラと呼ばれる数多くの頭を持つ怪物が棲む。直接の目撃談がほとんどないために、ハイドラについて詳しくは判っていないが、体は竜類に似て、長い首が何本も生えており、首の先端には人間に似た頭が付いているらしい。

javelin snake　ジャヴェリン・スネーク

長さ1mほどの毒蛇であるが、四足動物の死角である首筋に樹上から跳びかかるのを得意とする。ジャヴェリン（投げ槍）の名前は、跳躍時に体の前半が細長く伸びて投げ槍に似た姿になるところから与えられた。

kobold　コボルト

ゴブリンよりも小型の人間型種族。肌の色は青色で、頭髪、眉毛はない。顎と眼は小さく、鼻が極端に大きい。たいていは地下に棲む。

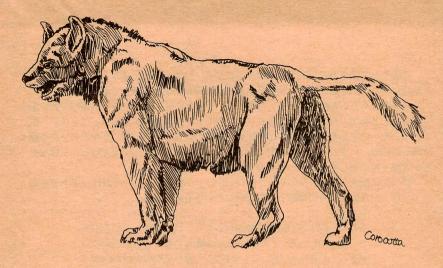
leucrocota　リュークロコッタ

corocotta　クロコッタ

リュークロコッタは中型の偶蹄動物で、脚は細長く、非常に素早い。巨大な口を持っており、しかも、人間などとは違って顎の骨がそのまま歯を形成している。そのため、リュークロコッタに噛み付かれれば、この硬い歯で骨まで砕かれる可能性がある。

このおそるべき骨の歯は、リュークロコッタの武器でもあるが、また弱点ともなっている。岩などに誤って噛み付いてしまって歯が折れでもしたら、致命傷にもなりかねないからである。

リュークロコッタのもうひとつの武器はその声帯である。さまざまな動物の鳴き声を真似ることができ、それによって餌をおびき寄せることができるのだ。人間もその例外ではない。

クロコッタはリュークロコッタによく似た猛獣で、リュークロコッタと同じく骨の歯列を持ち、また他の動物の声を模倣することができる。ただ、脚は猫科の猛獣に似たもので、リュークロコッタほど敏捷ではない。一説によれば、クロコッタは、ハイエナとライオンを掛け合わせてリュークロコッタを人為的に生みだそうとした魔術師の作品であると言われる。

ogre　　　　　　　　　　　　オグル

身長３mほどの人間型肉食動物。狂暴かつ残忍。もしオグルが多産であれば、この世界は彼らのものになっていたであろう。

orc　　　　　　　　　　　　オーク

非常に好戦的な、豚のような鼻を持った人間型種族。頭髪や髭、眉毛はないが、雄の首から下は剛毛に覆われている。体力の面では人間を凌駕し、知能もけっして悪くはない。そのため、われわれ人間の社会の強力な敵対者となっているが、オークは魔術の能力において人間にかなり劣るために、深刻な被害を受けるまでには至っていない。雌は厚化粧をする。

phoenix　　　　　　　　　　　フェニックス

体形や大きさは鷲に似ているが、青色の尾を除いた体は紫色で、尾の周辺に薔薇色、そして頸の周りに金色の羽毛が散らばる鳥。頭部には鶏のようなとさかがある。目撃談を総合すると、この鳥は常に一羽で行動しているようであるが、目撃者によるそのフェニックスの描写はどれもがまったく同じである。つまり、この鳥は世界に一羽しか存在していないように思える。もっとも、数百年にわたって目撃されていることから考えれば、そのようなことがあるとは考えられない。おそらく、個体差がほとんど無い種なのであろう。

roc　　ロック

伝説などで語られる巨鳥であるが、実在する。目撃談を総合すると、ロックは高山地帯に棲む巨大な猛禽類で、嘴の長さは人間の身長を越えるほどである。

ロックはもちろん肉食であり、目撃談も、襲われた時のものが多い。体形が鷲に酷似しているので、高空を飛翔するロックを見ても、ただの猛禽だと思ってしまい、気がつかないのであろう。飛行中の魔術師が遭遇したものを除けば、高空のロックを確認した例は、いずれも、急にあたりが暗くなったのに驚いて空を見上げると、ロックが太陽を覆い隠していたというものである。

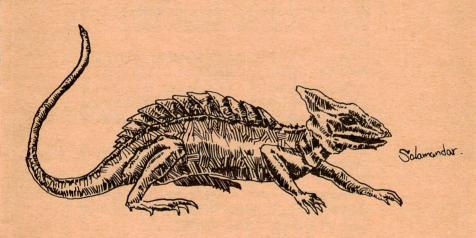
ロックに捕えられて、しかも生き延びた例は、一件しかない。それは、アトランのデリオファリムが自身の体験として記録しているものである。

> 「幹を一周するのに半時間かかるぐらい巨大なオークの木の下で一夜を明した私は、突然頭上から降ってきた白っぽい泥にうずまってしまった。驚いて上を見ると、遥か上空の大枝からロックが急降下してくるのが見えた。今や私を胸まで埋めつくしている泥は、こいつの糞だったのだ。我が魔剣エクリシオラは糞の下で転がっているし、魔術を使おうにも口の中は糞だらけで、なすすべがなかったのである。
>
> 私を掴んだロックが高空に舞上がると、別のロックが下方から舞い上がってきた。そして、この２羽の巨鳥は、私をめぐって争いを始めたのである。幸運にも、私を掴んでいたロックが早々に勝利を収めたために、大地へと落下することも、２羽の鈎爪で引き裂かれることもなかった。だが、依然として私は死の顎に捕えられたままであることに変りはなかったのである。
>
> ところが、ロックの巣に着き、いよいよ食べられるという段になって、私の幸運は尋常ではないことに気がついた。なんと、先ほどの戦いで、このロックは下嘴を中ほどから失っていたのである！　そのおかげで、私はそいつの食事となり果てずに済み、こうして生き延びているわけなのだ」

もっとも、デリオファリムは単なるほら吹きであるという説もあるので、この報告を鵜呑みにすることはできないのだが。

Salamandar　　　　　　　　サラマンダー

白い斑点を持った、全長1.5mほどの赤色の爬虫類。この生物は、燃えさかる炎のなかでも生きていられると言われているが、その理由としては相反する２種類の説が存在する。

まず、サラマンダーはそばに寄るだけで凍死するぐらい体温が非常に低いために、熱や炎に耐えられるという説。そして、サラマンダー自身が炎の怪物であって、炎は益になりこそすれ、害になることはないという説である。

troll　　　　　　　　トロール

森や丘に棲む、身長３mほどの人間型生物。皮膚は緑色で、ごつごつとしている。瞼が肥大しているので、眼は瞳の部分しか外からは見えない。人間型生物ではあるが、知性は僅かなもので、道具などは用いず、自然の洞窟をねぐらにしている。肉体は俊敏かつ強靱であり、しかも肉食であるから、われわれにとっては非常に危険な生物である。

vodyanoi　ヴォジャノーイ

　エルディンの湿地に棲む怪物。ヴォジャノーイに言及した書物は少なくない。しかし、その多くが、ヴォジャノーイを泥人間としか形容しておらず、はっきりと形態を描写したものはわずかである。そのような書物の中で、もっとも有名なのはガンゲックスの文書館に残されているスクロールである。これの著者は、ホーリュー沼（エルディン中央部に点在する沼地のひとつ）のそばで馬車が壊れ、仲間が代りの馬車を取ってくるまでの間、荷物の番をするために残された時にヴォジャノーイに出会った：

> …結局、私はオドルと共にホーリュー沼で待つことになった。別に不安を感じはしなかった。なんといっても荷物はここにあるのだから、別の馬車を工面しに行ったハンゼンとユーゴールの方が不安だっただろう。
>
> 　太陽が沈むころ、突然、馬たちが騒ぎだした。そして、沼の方から大きな水音が聞えた。あわててそちらを見たが、ちょうど太陽は沼の反対側に沈もうとしていたので、ほとんど何も見えなかった。今から思えばその時に逃げ出せばよかったのではあるが、荷物を捨ててはおけなかった。仕方なく、火を焚いて朝を待つことになった。
>
> 　黒虹が夜空に現れる頃、馬がまた暴れ出した。オドルは、指を唇にあてて私を制しながら、剣を抜いて沼へと近付いていった。しばらくすると、叫び声と水音があがった。沼までは焚き火の光が届かなかったので、一人残された私には何が起きたか判らなかった。すぐに、べちゃべちゃという音をたてながら泥まみれのオドルが戻ってきた——手に剣を下げていたため、私にはそいつがオドルだと思ったのだ。だが、焚き火が崩れてひときわ大きな炎が上がった時、そいつがオドルではないことが明らかになった。口は大きく裂け、全身が鱗で覆われていた。
> …
>
> 　今なら、そいつの姿をもっと詳しく説明できる。ヴォジャノーイ（あの夜にはこの名前を知らなかった）の青緑色の鱗は人間の親指の爪ぐらいの大きさで、手の平と足の裏、そして顔以外を覆っている。耳朶はなく、かわりに耳の穴を塞ぐ小さな肉襞が備っている。日頃は魚や小動物を捕食しているが、人間女性の肉はヴォジャノーイの味覚をもっとも満足させる（壊れた馬車の中の「荷物」はそいつを興奮させただろう。若い娘を食する機会はめったに無かっただろうから)。指は節くれ立っているが、器用さは人間に劣らず、ペンさえ持てる…

○『捨てられた神々』の創造物

『捨てられた神々』にこの世界が委ねられていた時代、彼らはモナールの創造物を手本としてさまざまな生物を生み出した。それらの多くは『捨てられた神々』封印の後に滅び去ったが、中にはまだ生き延びているものもいる。現在この世界に見られる、いくつかの動物の特徴を併せ持った怪物は、ほとんどがこれらの哀れな生物たちであると言われている。

chimera　　キメラ

獅子の首に山羊と蛇の頭が付いた――獅子の頭もあるが――肉食獣。体格は獅子よりも大きい。山岳地帯に棲むと言われるが、平地での目撃報告も多い。

かつてヘクシスの宮廷魔術師であったガイゲイリーはこの怪物について、

> 獅子は山羊を食らい、山羊は蛇を踏み殺し、蛇は獅子を毒殺する。この三者がひとつのものとなったキメラは、同じ種族内で殺しあう人間型種族に対する『捨てられた神々』の皮肉である。

と書き残しているが、キメラが「自殺」したり、キメラ同士で殺しあうところを目撃した者はいない。

cariatide　　カリアティード

カリアティードは岩石の体を持った生物で、翼を持つものもいれば、体中にとげを生やしたもの、果ては人間女性の姿をしたものもいる。

岩石や金属で作られた生命体は、普通「ゴーレム」と呼ばれ、カリアティードもその一種であることはまちがいない。ただ、カリアティードは、他の生物に対して攻撃であることと、石柱やガーゴイルに擬態することが特徴である。

カリアティードの正体については今なお不明な点が多い。スタンザックスのヴェリダンによれば、

> 「カリアティードはカリアティードとして生まれたものではない。『捨てられた神々』が下僕として作り出したゴーレムが、『捨てられた神々』の封印によって主人を失い、変容して生まれたのがカリアティードである。」

であり、また、ミナレルディのクラトゥは、

> 「『捨てられた神々』は下僕として数多くのゴーレムを使用していたが、それらのゴーレムの中には、生命力を与える力を付与されていたものもいた。『捨てられた神々』が封印された時、その中の一体が精神に異常をきたし、今日にいたるまで怪物を岩から削り出している。それがカリアティードである。つまり、カリアティードはゴーレムが作り出しているのだ。」

と語っている。

griffon　　グリフォン

巨大な鷲の後に獅子の下半身をつなげたような怪物。より正確には、獅子の背中に羽根を付け、前足と頭を鷲にしたもの。ただし、大きさはふつうの獅子とは比べものにならないほど大きい。

hippogriff　　　　　　　　　　　ヒッポグリフ

馬の体と鷲の頭、羽根、足を持つヒッポグリフは、雄グリフォンと雌馬の間の雑種であると一般には信じられている。確かに、ヒッポグリフは外見上はグリフォンの獅子の部分が馬に入れ替わったものであり、また大きさも普通の馬よりふたまわり大きいので、上記の説にもそれなりの説得力があるように思われる。

しかし、私はこの説をうのみにすることはできない。まず、体格が獅子の数倍もありグリフォンと、馬が交尾できるとはとうてい思えない。そして、たとえ交尾できたとしても、その仔を普通の雌馬が生み落とせるだろうか？　馬の胎児よりはるかに大柄で、しかも嘴と鉤爪を持つであろうヒッポグリフの仔は、雌馬の子宮を傷つけるに違いない。

出産の問題に関して「ヒッポグリフ＝馬＋グリフォン」論者であるスタンザックスのヴェリダンは、各地でときどき報告されている、妊娠中の雌馬が腹を切り裂かれて殺され、しかも胎児が盗まれているという事件をその証拠として挙げている。つまり、彼は「ヒッポグリフは親の腹を破ってこの世に誕生する」と言いたいらしいのだが、これは証拠としてはあまりにもおそまつである。なぜなら、かの一連の事件の被害者には、雌牛や雌鹿、そして人間も含まれているからだ。ヴェリダンの説に従えば、「ハーピー＝人間＋グリフォン」とでもなるのだろうか。

mantichora　　　　　　マンティコラ

遠くから見れば獅子に見えるが、尾の先端には毒針、そしてたてがみの中央には、人間に似た顔が付いている。しかも、耳元まで裂けた口には鋭い牙が３列、内側に傾いて生えているため、一度噛み付かれたらどちらかが死ぬまで離れない。非常に残念なことだが、このおそるべき獣は人肉を好むらしい。

peryton　　　　　　ペリトン

猛禽類の体に、鹿の頭と脚を持つ怪物。羽毛は青から緑。人肉を好む。『捨てられた神々』がまだ封印されていなかった頃には、集団で人間の居住地を襲ったらしいが、現在では棲息数が激減している。そのためであろうか、ペリトンがかつては大集団で行動していたことを知らずに、ガンゲックスのサフメーンは自著『大博物誌』で次の様な説を述べている。

> 四足動物の脚・頭と、鳥類の胴体という組み合わせがヒッポグリフのそれの逆であるペリトンは、ヒッポグリフの鬼子である。この、鹿の頭を持った鬼子が生まれても、親は自分と同じヒッポグリフであると思い込んで育てるために、体格のまったく違うペリトンは死んでしまうことが多い。それで、もともと生まれることさえ稀なこの動物を見ることは、きわめて難しいのだ。

【小サイヴァル著：『スカルゲルン博物誌』第８～11章より抜粋】

CHIMERA.